

昔々、或るスルタンが次のような規則を作った：嘘をついた者は公共の広場で首を刎ねられなければならない。或る日、イブ・ナッシュヤが嘘をついてしまい、彼は他の嘘つきと同じ裁きを受けることになった。彼は、金曜日に首を刎ねられることを知った。告げられた処刑の 2 日前に彼は森に家を建て、そこに移り住んだ。彼は同様に、家に続く道も作った。

彼は町に行き、神が森に住まわれたと知らせた。神の御姿を見たいと望むすべての者は、その家に向かう前に、ひとり当たり 5000 フランを彼のかばんに入れなければならなかった。しかし、人々が向かう前には、まずスルタンを待たねばならなかった。彼こそが神を見る最初の間になるのだ。イブ・ナッシュヤは言った。

「神のお告げがあります。《そこに行って神を見なかったという者は父なし子である》」。

スルタンは家に行ったが誰にも会わなかった。彼は怖くなった。彼は父なし子と言われたくなかったので、何も言わないことにした。彼は[神を見たかと]問われ、神に会ったことを認め、神を称賛した。今度はスルタンの妻の番だった。彼女は家に行ったが、神を見なかったとは、父なし子とされることを恐れて敢えて言わないことにした。彼女も夫と同様嘘をつくことに決めた。彼女は調子に乗って言った。

「私は神がソファに座っておられるのを見ました。とても良い香りがしていました」。

彼らの息子たちの番になり、そして最後の村人になっても、皆それぞれ、神を見たということで意見が一致した。イブ・ナッシュヤは発言し、神の家までの道は 16 時には閉じられるので、皆その場を離れる必要があると知らせた。

イブ・ナッシュヤの首を刎ねる時が来た。彼は発言を求めて言った。

「スルタン様、あなたは嘘をついたものは誰でも首を刎ねると決められました。あなたは、本当に神を見たのですか？」。

「いかにも、私は神を見た」。

彼の妻も息子もきっぱりとそう答えた。

イブ・ナッシュヤはこう言った。

「これで、スルタンの首を刎ねる時が来た。何故なら、あの家を建てたのは私なのだ。スルタンは嘘をついた。首を刎ねるべきだ」。

スルタンとイブ・ナッシュヤは罪を免ぜられ、この日以降、この規則は適用されなくなった。